

法科大学院 「適性試験」追試験

当校講師による
解答・解説
今後の適性試験対策のご参考
にしてください!

大学入試センター 2004年7月11日(日)実施試験

以下は解答・解説のみの掲載です。なお、これらの解説ページは、都合によりプリントアウトができません。ご了承ください。

第2部 読解・表現力

第1問

【全体コメント】 本文の記述内容と整合する選択肢を選ぶ問題。論旨は明快であり、解答しやすい問題である。

問 正解

選択肢の記述を本文の対応する箇所と照らし合わせることで、正解を導き出せるだろう。

の「幕末の中津藩では、身分が異なる者同士が会話を通じて理解し合うのは困難であった」については、本文には「階層によることばづかいの相違には顕著なものがあつた」とあるものの、それが異なる階層間の意思疎通を不可能にしていたとまでは述べられていないので、適当ではない。そもそも、本文には異なる階層間の意思疎通についての記述はなく、の「幕末の人々は…自分と異なる身分の人と話するときには同じ身分の人と話すのとは異なることばを用いるのが普通であつた」も不適当である。の「農民のことばに方言形式が顕著に認められるのは、対象地域が江戸から遠く離れた九州だったからである」については、本文ではことばの変種の多少、地方差の多少は社会階層の上下に関係づけられているだけで、江戸からの距離には関係づけられていないので、適当ではない。の「幕末にはどの藩でも社会階層ごとのことばの相違がみられたが、中津藩での相違に比べて小さかつた」は、本文の「専ら中津旧藩士の情態を記したるものなれども、諸藩共に必ず大同小異に過ぎず」とも述べられている」と整合しない。の「幕末の日本では、社会階層ごとの風俗の相違と比べてことばの違いは大きく」は、本文の「ことばの変種のありようが、社会階層という背景の違いにパラレルに関係していた」という記述と矛盾する。

これらに対し、の「福沢がスケッチした幕末の中津藩におけることばの状況は、現代の欧米におけるように階層差を軸に変種を分析できるものであつた」は、最初の段落の内容を要約的に表現したものと考えられる。したがって、正解はである。

第2問

【全体コメント】 文章整序、空欄補充、記述内容の把握の問題。文章も設問も標準的なものである。

問1 正解

同一の語句の使用に注目すると、(ア～ウ)のグループと(エ、オ)のグループに分けることができる。アとイで同じ「こわがらせ、あやつる」という表現が用いられ、しかもイでは「やはり『こわがらせ、あやつる』ためです」と述べられるので、イはアよりも後だと考えられる。また、イとウも同じ表現「どんなことでも『暴力のひきが

ね』になる」を用いており、しかもイでは「どんなことでも『暴力のひきがね』になるということは」となっているので、イはウよりも後だということがわかる。したがって、イはアとウの両方を受けてその後に来るのである。

エとオは、暴力の目的は相手のコントロールにあり、暴力とは「痛い目にあいたくなかったら、俺の言うことを聞け」という命令なのだ、という冒頭の主張を受けて、なぐったりけったりすることが、それ自体は目的ではなく、「絶対に俺に逆らうな」というルールを家族に強制するという目的のための手段である、ということを示すものである。

したがって、〔ア～ウ〕のグループと〔エ、オ〕のグループの先後関係は、(エ、オのグループ) (ア～ウのグループ)となり、しかも後者は((ア、ウのグループ) イ)である。これに合致する選択肢は しかない。

問2 正解

暴力をふるうのは相手を「こわがらせ、あやつる」ためであるが、何が「暴力のひきがね」になるかわからなければその状態を永続させることができる。この目的を達成するために暴力をふるう方法として最も適当なのは、 の「理由もなしに」であろう(これは「何の理由もない」という意味ではなく、「妥当と思われるどのような理由もない」という意味である)。 の「情け容赦もなく」は暴力の程度が激しいことを表すものであり、この段落での議論の内容とはややずれる。 の「法律を無視してまで」については、本文では法律の話は一切なされていないので、唐突すぎる。また、暴力に晒されるのは女性や子どもであるのだから、 の「誰に対してもみさかいなく」は不適當であろう。 の「懲りることなく」は暴力の執拗さを表わしていて紛らわしいが、暴力の理由の特定しがたさを表現するものではなく、 の方が適當であろう。

問3 正解

本文の意図が、家族に向けられる暴力には相手をコントロールするという目的があることを示すことにあるのは明らかであり、これに合致する選択肢は の「暴力を理解するには、その背後にある動機に注目することが大切である」であろう。

の「暴力をふるう傾向の強さは、生まれつきの性格によって決まる」、 の「暴力をふるう人は、自分自身も過去に暴力をふるわれた経験をもっている」、 の「暴力を少なくするには、カウンセリングが何よりも効果がある」は、いずれも本文での議論とは関係がない。 の「暴力をふるう人は、相手を傷つけることによって満足感を覚える」は、相手を傷つけること自体を暴力の目的としているので、不適當である。 の「暴力は、相手の特定の行動がきっかけとなって起こることが多い」は、本文の「どんなことでも『暴力のひきがね』になる」という記述と矛盾する。

第3問

【全体コメント】自然科学分野の文章を読み、下線部の意味と空欄にどのような趣旨の文が入るかを考える問題。特に難解な文章ではないので、確実に正解を導き出せるだろう。

問1 正解

下線部を含む文に続く文が「すなわち」という接続詞ではじまっているので、そこに述べられている内容(「ある言語を母語として何の苦もなくしゃべれるようになるためには、およそ3歳までにその言語が話されている環境に生活し、その言語に用いられる音声の特徴を記憶せねばならない」)が「臨界期」という語の意味である。これに合致するのは、 の「何らかの能力の獲得が可能になっているある限られた時期」である。

「およそ3歳までに」という語から、ある限定された期間が問題であることがわかるので、 の「持久力が備わってくる時期」、 の「物理的環境がすべて整う時期」は不適當である。また、言語の習得にとって「期間」と

「環境」では前者の方が重要であることは明らかなので、 の「一定の間集団生活に入っていき時期」は不相当であり、 の「ある発達の段階をすぎると」も本文の記述とはずれずる。

問2 正解

空欄アについては、生後すぐに内耳を摘出された鳥は歌をうまくうたえなかったのだから、お手本を(十分)聴くことが歌の学習に不可欠であると言える。この内容に対応するのは、Bの「歌の学習過程では聴覚入力と歌の聴覚記憶が必要である」である。空欄イについては、いくらお手本を聴いても自分で練習する際に耳が聴こえないとうまく歌えないというのだから、お手本だけでは不十分であることを述べているDの「お手本の歌の記憶と自分のうたう歌とを照合させる必要がある」が適当である。空欄ウについては、成鳥から内耳をとっても歌は維持されたのだから、一度歌い方を身につけさえすれば鳥は自分の歌が聴こえなくても歌えるのであり、これに対応するのは、Cの「いったん完成された運動パターンは聴覚フィードバックなしでも維持される」である。空欄エについては、空欄を含む文より後の部分にその内容が示されていると考えられる。エの仮定が正しいことを証明した実験の内容が「自種と多種の歌を同時に聴かせると、ほとんどの鳥が自種の歌を選択的に学習した」というものであるのだから、エに入るのはAの「どの歌が自己の歌にふさわしいのかを知るために、それぞれの種の鳥は非常におおざっぱな歌記憶を生まれつきもっている」であろう。なお、Eの「若鳥のさえずりのパターンは遺伝的に決定された生得的なものである可能性が非常に高い」は、「歌学習」の観念を否定するものであると考えられ、不相当である。したがって、正解は となる。

第4問

【全体コメント】 講演の文章を読み、接続詞の誤りを見きわめ、空欄に適語を補充し、下線部の意味を答える問題。

問1 正解

議論の流れを把握していれば、正解を導き出すのはそれほど難しくないであろう。与えられた6つの接続詞のうち明らかに不相当なのは、前の「学習ないし教育は概してあれこれの目的を達成するための手段とみなされがち」と後ろの「もし学習を手段的にではなく、人間的であるとは何を意味するかという人生の最初から最後まで広がるをもつ次元として考えるとしたらどうでしょう」という対立する内容を「しかも」で結んでいる e であろう。この語を含む文が c ではじまる文や d ではじまる文を受けているわけではないことに注意したい。

問2 正解

3つの空欄に「人間性」と「社会」のいずれかを補充する問題。空欄アについては、空欄より少し前に「われわれは生きはじめた瞬間から生きているかぎり学びつづける種類の存在である」とあるので、「(学習をしつづける)」というのはわれわれ人間の性質であって社会のそれではないことになる。よって、アに入るのは「人間性」である。

空欄イについても同様であり、ルネの定式化した普通とは異なる考えとは前段落の内容に他ならないのだから、学ぶということの価値は私たちの「人間性」の一特徴であって私たちの「社会」のそれではないはずである。

これらに対し、空欄ウについては、私たちの学習(私たちの人間性そのもの)を可能にしたり不可能にしたりする条件は人間性とは異なる次元に属すると考えられ、ルネに送った E メール「学生が自分たちの教育のおこなわれている社会を意識して、つねに省察してほしい」という記述と考え併せると、ウに入るのは「社会」であろう。したがって、正解は となる。

問3 正解

「ユートピア」という語の響きに惑わされないようにしたい。ここでの「ユートピア」は、学習を肯定しない、そしてそのかぎりでもルネにとっては批判すべき社会を表わす語である。その説明として最も適当なのは、の「もう教育も学習もしなくてよいような社会」であろう。言うまでもないが、「もう教育も学習もしなくてよい」というのは、ルネの観点からすれば人間性の否定であり批判されるべき事態である。

の「諸文化に対する抑圧が存在しなくなる社会」、の「対立する目的のあいだのたたかいがなくなる社会」、の「教育によって誰にでも成功の可能性が開かれる社会」は、いずれもルネの支持するものではない、普通の学習のポリティクスにかかわるものであり、不適当である。の「教育の自律性を絶対的に認めるような社会」は、「われわれの(学習をしつづける)人間性を十分に認めないような」という表現と矛盾する。

第5問

【全体コメント】 抽象概念を具体的な事例を挙げて説明する文章の記述内容を把握する問題。文章は平易だが、具体例がどのような事柄に対応するのかに注意を払っていないと、勘違いをしてしまうかもしれない。

問1 正解

第1段落では、「抽象化とは、取り扱いたい対象群の中から問題解決の鍵となる側面だけを抜き出し、それ以外の面は無視することにより、問題の考えなければならない範囲を限定し解を得やすくする手法だ」と述べられている。与えられた選択肢のうち、の「道順を教えるために地図を描くこと」、の「ものの個数を表したり計算するために数字を用いること」、の「さまざまな数量の変動を検討するためにグラフを描くこと」、の「家を建てたり改修したりするに先立って図面を描くこと」には、いずれも「重要な側面の抽出」という契機が含まれているが、の「(ビデオカメラを設置して)一部始終を録画すること」にはそうした契機がない。

問2 正解

第3段落の内容をよく読むことで、正解に近づけるだろう。の「硬貨を1枚入れたが、金額不足でどの飲料のボタンも点灯しなかった」については、硬貨を1枚でも入れれば、自動販売機はその金額に対応する状態に遷移しているのであって、ボタンが点灯するか否かは遷移には直接関係がない(硬貨の金額で購入可能な商品がないというだけの話である)。の「点灯しているボタンを押したが、しっかり押さなかったためか何も出てこなかった」については、ボタンを押すという操作が機械に受け付けられていないので、状態の遷移は起きていないと言える。操作が受け付けられて、自動販売機ははじめて別の状態に遷移するのである。の「買いたい飲料のボタンを押して飲料が出てきたが、まだ残額で購入できる別の飲料のボタンは点灯し続けていた」が、まさにそうした事態を表わしている。ボタンが点灯し続けていることは、必ずしも自動販売機が同じ状態に留まっていることを意味しない。それは飲料購入前とは別の金額に対応する状態に遷移しているのである。の「買いたい飲料のボタンを押したら飲料とおつりが出てきた」も、自動販売機が一定の金額に対応する状態から硬貨が投入されていない状態に遷移したことを意味する。の「硬貨を投入したが、そのまま通り抜けて払い戻し口に出てきてしまった」は、硬貨の投入が自動販売機に受け付けられていないので、遷移は起こっていない。したがって、正解は と である。

問3 正解

本文に「状態どうしの遷移による移り変わりを系統的に調べれば、どのような経路を通れば相手が敗けて自分が勝つ状態に到達しやすいかを知ることができる」とあるので、「ゲームに勝てる強い」プログラムを作ることによって状態の遷移(のパターン)に関する調査・知識がきわめて重要であることがわかる。これに合致する選択肢は、 の「ある手を打ったとき、どのような状況になるかを系統的に調べていくことができるから」である。

の「3の361乗という数は非常に多いが、有限個であることには違いないので、時間さえかければあらゆる状態を調べ尽くすことが可能だから」は、状態の遷移(のパターン)という観点を欠いており、不十分である。

の「電子計算機の処理速度は人間よりもずっと速く」は、「強い」プログラムの作成が可能である理由を機械の能力に求めているので、不相当である。本文には の「碁のソフトウェア開発を競うこと」に対応する記述はなく、 の「盤面の状態は…非常に単純な3つの場面しかない」は碁を有限状態機械として抽象化できることの理由でしかない。したがって、正解は である。

第6問

【全体コメント】 時間と因果連鎖(のパラドクス)に関するエッセーを読み、設問に答える。文章がやや難解であり、内容をしっかりと把握してから設問に取り組むようにしたい。

問1 正解

空欄補充の問題。タイム・トラベルが不可能であるためには、自己反駁的な因果連鎖が成立する必要がある。空欄 a に入るのは の「可能性」である。前段落の「通常のありふれた連鎖も、閉じた時間的曲線においては自己反駁的になりうる」がヒントになるだろう。

問2 正解

問1と同様、空欄に適語を補充する問題であるが、問1よりも見極めは容易であろう。空欄 b を含む文に続く文に「そのような系は…排除される」とあるので、自己反駁的な系には成立する余地はない(と筆者が考えている)ことがわかる。よって、正解は の「可能性」であろう。

の「必然性」がやや紛らわしいが、「必然性を含意しない」と「排除される」では意味がずれるので、不相当である。

問3 正解

筆者は、タイム・トラベル反対論者と同様、幼時自己殺害すなわち自己反駁的な因果連鎖は不可能であると考えているが、それは閉じた時間的曲線の存在のゆえにではなく、自己反駁的な因果連鎖が整合性の条件を満たしていないからである。この点を念頭に置いて、与えられたそれぞれの文を見てみると、アの「幼時自己殺害は不可能である」に対して筆者は肯定的であると考えられるが、イの「タイム・トラベルの可能性は幼時自己殺害の可能性を含意する」には筆者は賛成しないであろう。本文に「閉じた時間的曲線の存在とタイム・トラベルの可能性とを合わせても…自己反駁的な系…は…排除される」と述べられている。ウの「閉じた時間曲線の場合には、開いた時間曲線の場合と異なり、整合性の条件を考慮する必要が生じる」は、最後から2番目の段落にある「いかなる因果連鎖も…周囲の状況によって課される整合性の条件を満たさなければならない」という記述と矛盾する。したがって、正解は である。

第7問

【全体コメント】 極めて一般的な形式の空欄補充、および要旨把握問題である。問1の選択肢の語句が、～で全て異なるため、比較的容易に判断できる空欄 B を先に考えていくことがポイントであろう。問2・問3に関しては、本文の筆者の主張の展開を意識して解いていけば正解を導くことができた問題である。

問1 正解

A の前の文では、「ウォルフレンの著作とファローズの論文とでは、同一には論じられない。」と書いてあるが、後の文では、「両者とも議論の提出の仕方としては「日本文化論」に似ている点を指摘しておこう」と記されている。つまり、ウォルフレンの著作とファローズの論文は同一には論じられないものであるが、議論の提出の仕方は似ていると言っているのである。ゆえに、A には「ただ」が入る。

B の前の文は「その多くが経済摩擦・貿易問題を論じながらも、「日米構造協議」にみられるように「日本システム」全体に触れており、また、「日本文化論」を参照している。」に対して、後の文は「その反応はデール＝ウォフォレン＝ファローズの見方からなされており、「日本文化論」をきわめて「日本中心主義」「自文化中心主義」的な日本人の態度の背景をなすもの「日本権力のイデオロギー」とらえている。」と前の文をさらに付け加えている。ゆえに、B には「しかも」が入る。

問2 正解

傍線 の前の一文で、「残念なことにはこの「裏返し」論はもとの「論」と同じく、ベネディクトのもっていた「複眼的視点」に大きく欠けている。」いわゆる日本を肯定的・否定的どちらの立場で論じていようと、「世界における日本の孤立」を論じているだけなので、「閉ざされた議論」のサイクルをまわるといふことに当てはまるのは選択肢 となる。

問3 正解

日本の特殊性は西洋の論理枠組では理解できない「日本中心主義」「自文化中心主義」であるので、この事柄が肯定的に書かれている選択肢は である。ゆえに、 が正解。

第8問

【全体コメント】 基本的な内容把握の問題である。本文の内容把握が的確に出来ていれば難しい問題ではない。この問題を間違ってしまった方はもう一度、文章を整理して読む癖付けをしよう。

問1 正解

本文の内容と合致しないものを探せという問題なので、本文と照らし合わせてみる。

は本文の第2段落の上から2行目から3行目に「それは次の事情によってGUIが操作時間を短縮すると言われているからである。」と書かれているのに対して、第3段落の最初の一文に「しかし、習熟した使い手が操作する場合についていえば、旧来のコマンドを打ち込む方式の方が操作に要する時間が短い。」と述べている。ゆえに、 は本文と内容が合致しているので間違い。

は第4段落の2行目から3行目にかけて、「熟達した人であっても、GUIを使う方がリラックスできて、そのため「使いやすい」と考えるかも知れない。」と述べているので、本文と合致しない。ゆえに、正解。

は最後の一文で「このように、一見明らかに思える「使いやすさ」にも多面的な評価基準があることを知っておくことは大切である。」と述べている。ゆえに、 は本文の内容と合致するので間違い。

は第4段落の最初の一文で「もちろん、その答えは「使いやすさの評価基準は使い手や状況に応じて異なる」と書いてある。ゆえに、 は本文の内容と合致しないので正解。

は第4段落の4行目から5行目に「逆に目にハンディキャップがある人にとっては GUI はそもそもどこに何があるか分からないため使うこと自体が困難であったりする。」と述べている。ゆえに、 は本文の内容と合致するので間違い。

問2 正解

GUI の利点は、 画面に表示させられているメニュー(使うことができる操作の一覧で、使い手の指示によって画面に表示させられるもの)やアイコン(個々のファイルやプログラムを表す目印)を見ればどのようなコマンドや操作対象があるかは覚えていなくても分かる。 メニュー・アイコンを選択するだけで操作できるから打ち間違いの心配もない。 よく使うファイルやプログラムのアイコンを画面上のすぐ指し示せる位置に配置しておくという調整も可能であるの3点である。

この内容に該当しない選択肢は と なので、正解は となる。

問3 正解

A の前文では「短い時間で操作できるソフトウェアの方がそうでないソフトウェアよりも「使いやすい」と考えられるだろうか？」について議論されている。 A の前にある接続語は「そもそも」なので、前で議論されているキーワード語句を当てはめるべきなので、正解は となる。

第9問

【全体コメント】 内容把握の問題である。本文の言い回しが難解なため、一読ではすんなり入ってこない文章であるがドイツとイギリスの法社会の違いに注目して読解してゆけば内容は捉えられる問題である。

問1 正解

の内容は第2段落の5行目から6行目の「法律家は広義に、裁判官・弁護士・法学者・立法家・官僚を包括しており」の内容と合致しているので間違い。

の内容は第3段落の9行目から11行目の「ドイツ法律学では、解釈学にしる、立法学にしる、歴史的発展段階における時代思潮のエキス、たとえば神学的ドグマ、自然法による幾何学的方法、観念論的自由とかいうように、各種のイデオロギーの遺産をその中に集積して来ている。」の内容に合致するので間違い。

の内容は第2段落の4行目から5行目の「法規形成」・「制定法としての確認」の基礎づけを行う装置なのである。」と書かれているが、選択肢 で述べられている「大学という知的同質社会の内部」とは述べられていないので著者の見解とは合致しない。ゆえに、正解。

の内容は第2段落の2行目から3行目のところに、「いいかえれば、社会的事実関係から、その中で法技術的加工(たとえば一般化・体系化など)が加えられて法規への吸収作用をするパイプとして考えられて来た。」の内容と合致するので間違い。

の内容は第2段落の6行目から7行目のところに、「そのままドイツのみならず、ヨーロッパ、さらにローマにおいても通用しうるものである。」の内容と合致するので間違い。

問2 正解

選択肢の内容は、第3段落の第1行目「ドイツの法曹法が教授法といわれるのにはそれだけの歴史的基盤がある。」と、第3段落の7行目から11行目の「つまり法律学は各時代の思想に対して光栄ある孤立を守り通して来たのではなく(中略)知識の交流をなし、むしろ主体性を確立しながら新しい時代に生き抜いて来たわけである。それゆえ現代のドイツ法律学では、解釈学にしる、立法学にしる、歴史的発展段階における時代思潮のエキス、たとえば神学的マグマ、自然法による幾何学的方法、観念論的自由とかいうように、各種イデオロギーの遺産をその中に集積して来ている。」に合致してくるので、 が正解となる。

問3 正解

ドイツとイギリスの「法社会」の異同に関して聞かれているが、ドイツの「法社会」について述べられているのは、第2段落である。ここでは、法律家・法曹法は法形成・運用の直接の担い手として、「法規形成」・「制定法としての確認」の基礎づけを行う装置なのであると筆者は述べている。これに対して、イギリスの「法社会」について述べているのは第5段落である。ここでは、イギリスは、実務法曹の国であり、法学者の法曹界での地位は低く、法形成への寄与は大陸に比べれば著しく劣っている。法社会の構造がドイツと異なるのは、時代の思想を生み出す社会と、法学の社会と、さらに、判例をつくりだす社会とが相互に分離しており、厚い社会階層の壁で分断されていたことだと著者はのべている。この内容に合致しているのは であるので、 が正解となる。

第10問

【全体コメント】 文章整序の文題である。この手の問題は論文とはどのような形で書かれているのかを体系的に捉えられるとすんなり把握できる問題である。今後も必ず出題される問題形式なので、この手の問題は必ずできるようにしておこう。

問 正解 - - - -

「アジアを1つの集合体として把握したい誘惑にかられるのは、きわめてヨーロッパ中心主義的なまなざしで、アジアを見つめることなのである。」この文に続く文章構成を考えればよいということである。筆者はアジアを1つの集合体として把握することに否定的に考えている。ということは、ヨーロッパ人的発想をまず持ち出して、その後、その発想に異を唱える構成だと捕らえればよいので、 となる。

第11問

【全体コメント】 一般的な空欄補充と内容把握の問題である。文章自体は難解ではないが、解答の仕方に工夫が見られるため、本文の内容を的確に把握していないと失点をしやすい問題になっている。今後、このような形態の問題の割合が増えてくる傾向にあるため本文中の論理展開は短時間で的確に把握できる練習をしておこう。

問1 正解

問1は接続語の問題である。接続語の問題は前後の文脈を探り、つながりを考えればよい。

A は前文の内容を後の文でまとめているので、「そうすると」がよしい。 B は前文で、雑誌が学術情報の爆発を支えてきたと書かれているが、後の文では、この研究成果の流通に最近異変が生じていると書かれ

ている。これは、逆接のつながりになるので、「ところが」がよい。C のつながりは、前文の内容を後の文が補充しているので、「これには」が入る。ゆえに、 が正解。

問2 正解

ストールマンの意見に対する反論に適する選択肢を選ぶ問題であるが、ストールマンは著作権法は時代遅れで科学的知識の流通を妨げるものとなりつつあるということと、世界中の図書館のサーバーマシンにコピーを置くことで流通すべきだと述べている。このことに対する反論なので、 オンライン公開のために必要な強力なサーバーの維持管理は正解。また、筆者が前段落で述べている「論文の質の保証」という学術雑誌が担っていた役割はどうなるのかということが反論になるので、 も正解。

問3 正解

上の文章の論旨に合致する内容は選択肢Iの「学術論文の質は著作権のおかげでほじることができた」は第2段落で述べられているので合致している。その他の選択肢は本文中に明確に述べられていないので、1個だけ合致する。

問4 正解

本文の前半は学術論文情報流通の流れの変化。後半は学術論文の著作権について書かれている。この議論が大きく転回しているのは、第5段落なので、答えは肢 となる。

第12問

【全体コメント】 本文の内容は古典が混じり把握しにくい文章であるが、問題形式は一般的な空欄補充と内容把握の問題である。設問は安易にできているので、本文形態にとらわれすぎないで読みこなせば必ず得点になる問題である。

問1 正解

筆者は本文の最後に「風流には道徳的、破壊的離俗性と芸術的、建設的耽美性とが常に B に働いていなければならぬ。」と述べている。また、空欄Aの前にある接続語は「したがって」。前の文に順接の形でつながっている。前の一文を同じ表現で表されているのは耽美性のほうである。また、空欄Bには、筆者が風流は離俗性と耽美性が常に循環的に行わなければならない。と述べているので、空欄 B は円環性が正解になる。

問2 正解

筆者の主張を読み取ることができれば難しくない問題。筆者の主張は本文中の最後の一文に集約されているので、この内容と合致する が正解となる。

以上